つねにつねにカンヴスを破り
つねにつねに悪酒に浸れるわが友は
わが熱したる身をかき抱き
ともに夕陽のリズムに聽きとらんとはせり

しんに夕の麵麭をもとめんに
もはや絶えてよしなければ

ただ總身はガラスのごとく透きとほり
らんらんとして落ちむとする日のなかに
喜びいさみつつ踊る

わが友よ
ただ聞け上野寛永寺の鐘のひびきも
いんいんたる炎なり

立ちて爲すすべしなければ
ただ踊りつつ涙ぐむ炎なり

おろかなる再生を思慕することはなく
君はブラッシュをもて踊れ
われまづしき詩篇に火を放ち
踊り狂ひて死にゆかむ

さらにみよ
坂の上に轉ろびつつ日はしづむ
そのごとく踊りつつ轉ろびつつ
坂を上らむとするにあらずや

坂

この坂をのぼらざるべからず
踊りつつ攀らざるべからず
すでに櫻はしんじつを感じて
坂のふた側に佇ちつくせども

ひざんなる室ぬちにかへらねばならず
日としてわが靈
しほらしからざりしことはなけれど
ただ坂の上をおそる
いまわが室は寂として
かへらむとするわが前に

鼠を這はしめんとするか

ああわがみじめなる詩集を携ち
本屋より斷はられし詩集を持ち
悄として
されど踊りつつ坂をのぼらざるべからず

坂は谷中より根津に通じ
本郷より神田に及ぶ
さんとして
眼くらやむなかに坂はあり

斷章

さかずきを擧ぐれども
なんぞ寂しやみやこやちまたに

道

パンを求めゆくの道なり
狂氣にもなる道だ
電車と自働車とに埋るるの道なり
道は正直なり

人間が人間の
たましひの踏み潰されるところだ
太陽と月光との道であり
われと君との道であり
むしけらの道でもある

ときにふるさとの愛

あきらかに夏は
その道の上に落ちる
母と父と
愛の湧くところの道だ

酒場

酒場にゆけば月が出る
犬のやうに悲しげに吼えてのむ
酒場にゆけば月が出る
酒にただれて魂もころげ出す

酒場にゆけば月が出る
神經衰弱の月が出る

街にて

引き摺られ
息窒まりつつ
きんきんと叫びを立て
そうらうとしてわれ歩ゆむ

しめやかに雨ふる街を眺め昂ぶり
凍みたる手を温めんとして
そうらうとしてわれ歩ゆむ
わが天鵞絨の服は泥をもて汚され
わが靴はかなしげに鳴り
れいらくの汚なき姿をうつす

雨そそぐ都の街の上を
髪むしりつつ
血みどろに慘として我あゆむ

夏の國

夏は眞蒼だ
まだ見もしらぬ國國の
夏はしんから眞蒼だ
わが生れ

わが育てられたるの國
加賀のくに金澤の市街
ゆうゆうと流るる犀の川
川なみなみに充ち
するどく魚ははしる

ああ　その岸邊に
をみなごの友もゐる
けふ東京は雨
いちにち座してこひしさに
みどりの國のこひしさに

二つの瞳孔

われ生きて佇てる地の上
われとともに伸びる遠き瞳孔
しんとして
輝きわたる瞳孔

はるかなり唯とほくして
消えむとする二つの瞳孔

悲しみ窒息し
ぼうとして
葱のごとき苦きものに築きあげられ
輝やける二つの瞳孔

あさぞら

並木は蒼し
あはれあしたのミルク手にとれば
いのちは光る
きよみわたりし朝の空

郊外にて

畑について
のろのろと汽車はあるいてゐる
麥となたねのだんだん畑
汽車はのろのろあるいてゐる
のんきな汽車である

寂しき椅子

いつも來て座る椅子にもたれ
沈んで考へることが好だ
日がくれる
わたしは訪れてゆく

寂しきその椅子のあるところに
波うつ杯をしたひて
永き夜をかくては送る
いつはてるとなき
深きいたみに

十月のノオト

時計は銀にあらざれば光らず、帆は布を
もて金色を胎ましめざるべからず
頭の垂がるやうな詩、深き精神のそこひ

より搔きのほれ
こひしさにけぶりこもりて畑土に
ゆめのやうに雪はきえた
わたしは君のてがみを食べてしまつた
わたしは胃を悪くした

われは海光を浴びたり
もう雪が來た、どの山みても燻し銀
沖にむかひ永く佇む
沖より來る響、暗然として湧く力

くもり日の光やすらふほとり朱き葉は
走る上野の公園(そのふ)
靈魂は珠根を深く庭園に埋めた、いつか
は咲くだらふ
ああ　總ての人間に涙あれ

合掌

その一

坂はびろうど夕日炎炎
坂はみどりの下り坂、夕は祈りの鐘が鳴る

その二

耶蘇は畑中ゆうぐれに
われもゆふぐれ畑中に

葱はおとろゆ
夏の日に

耶蘇はものいふ
われもいふ

畑はひかりて麥を向き
耶蘇はゆうぐれ畑中に
われもゆうぐれ畑中に

その三

かうべ垂れ
いまは綠を合掌す
きびしき心となり
みづからを責むる心となり
主よ山のふもとにわれ住みて

すこし衰ろへ
いまは綠の木木に
その高きあたひに
かうべ垂れ合掌す

その四

むしけらのごとき

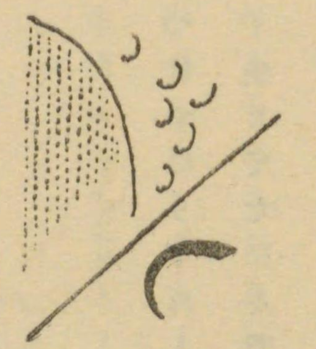
ひとみのけがれ
けがれしまま
けふは知る
深きざんけのあたひを知る

その五

みやこに住めど
心に繁る
深き田舍の夏ぞ
日を追ひては深む
いつくしみある地の夏ぞ

その六

ながれに向ひ釣を垂る
みなそこふかく
ひそめるものに觸れむとし
祈るがごとく釣を垂る
崖よりいまはなみだ垂れ
魚介のあなた



水噴上卓

ながれに感ず
波のおもみはきたる肩の上に
祈るがごとく釣を垂る

遠くよりのぶるもの

灯もつけずゆうぐれとなり
くらく坐りてなにを思へるや。
いま哀しみはびろうどのごとく

もの靜かにもおとなひきたり
われと和ごみとけゆけり。
ああかくもあえなる絨氈に
とりつつまるるごとくもあれば
わが身消えさるごとくはるかなり。
きけわがこころの遠きかたより

青き梢はやはらかく伸びもゆき
鳥雀のすずろなるけはひもす。

銀行街

とある銀行の角にかかりしとき
われははげしく感動す
くずるるはいのちの響にあらず
くずるるは銀のひびきなり

ああなめらなる石造建築に添ひて
われ烈しくせんりつす。

裸形崇拜

われの肉光る
うちより湧くところの
みどりの纖維舞ふところの
われの肉光りて走しる。

荒削りの血紅の鋭どきラインの
ただこれ祈禱體なり。
むしけらもふるるなかれ
眼はとこしへを射るのみにはあらず
われそのものを射る。

右

盗めよ
右の手をもて盗めよ
君にのみ盗むことの
一つなる靈性のゆるさる。
曲者はふくめんの黒

手をのべあひて
しづかにそそぐ夕のなみだ。
同志は靈性
夜はしんの黑の黑
しぜんに起るリズムの道を行け。
ああ窓のともしびを消し
同志は黑のふくめんす。

雨中佇立

豆つぶほどの蟇の子よ
おそるべき彈力をもて
雨の中を湧く蟇の子よ
まづしき夕の道の靴さきは怒りて

あやぶくもなんぢを踏まんとす。
なんぢのおもての
微動する雨の日の光線の
ああ豆つぶほどのひきの子よ
にんげんいま地上にあふれて呼吸し
あふれてなやむ
ひとしく神の名により

われとなんぢとの雨中なり
雨中は微微たり
愛は哀し
ああ豆つぶほどの蟇の子よ。

兇賊 TICRIS 氏

TICRIS はふくめんを篇す。
TICRIS は思ひなやみ、
盗むことを念んず。
盗むことを念んずるとき光を感んじ

心神を感んず。
ぴすとるを磨き、
天をいだき、
妹には熱き接吻を與へ、
林檎を與へ、
TICRIS は地下室のドアにもたれる。
べるりんの深夜。

TICRIS よ。

われは君をこよなく愛す。

君の指は神心きはまり

觸るれば總ての金銀は愛を感んず。

君の愛のむくるところ、

より深く、

電流となる强烈な愛だ。

いかなる冷酷なる寶玉のこころとは言へ、

君に觸れ

愛に觸るれば、

寶石は熱くなりて惚れる。

また君の一念つうじ、

寶石を愛づるときの君の瞳はうつくしく

晴れあがり、
輝やく。

君の常食は、
かつてクリストの常食であり、
萬人の與へられざりしところの聖晩餐だ。
寶石商レブランの假名。

あさゆふの食卓のうしろに、
君は君の終るべき陷井をしつらへ、
さかさまに墜ち碎ける。
自殺の陷井であり、
をはりの君の住家だ。

君はまたカフエエの卓にもたれ、

つくづくおもへば、
指は鳴る。
時計商店内部の光輝。
あさるべきスペクトオル層巒だ。
金銀時計の愛
君の手にふれむことを祈り
ときならぬ鈴を鳴らしめむ。

ああTICRISは又た思ひなやみ、
瞳をくもらし
十字を切り
哀しき夜行をおもふ。
露しげき深夜。
夜のびらうどの上を

一臺の自働車はすべりゆく。
べるりん午前二時。
まあぶるの建物をするすると攀づるもの、
黑曜石の昇天
ぴあの鳴る。
あはれふくめんの黑。
まなこは三角。

手にはあまたの寶石をささげ
するすると窓より下る。

金曜日午前チグリス氏在宅。
すずしき秋のあしたなり。
妹は紅茶を兄ぎみにまゐらす。
妹はチグリスの肩にもたれ

にくしんの接吻を爲す。
いもうとよ
おんみはなにごとをも知らず。
またとこしへに知ることなかれ。
おんみの坐し
おんみの臥すところの室内の器具。
すべては動き

すべては舞ひはじめるとき
わが兄の終りなり。
それまでは何ごとも兄を信ぜよ。

あさくさ

あさくさに來りて
くらき路次をくぐりぬけつつ
哀しきされど美しき瞳をさがす。
うつくしき瞳はみな招べども

こころ添ひゆかず
さまよひ疲れて坐る
公園(そのふ)のつめたき石。

夕日

あさくさにて夕日をながめるごとに
わがこころに
齢かさなりゆくごとし。

ちぢれし夕日のひび、
わが額に皺つくりゆくごとし。

とくさ

青きとくさを見よや
のぼりゆく青い莖を見よ
みやこのせまき庭もせに

ほそぼそと伸びるとくさの
そよ風もなき姿をみよや。

接吻

ある日はみづからの
白き腕(たゞき)にくちびるを當つ。
せんかたもなく

嘆きに似たるこころを持ち
されどわが腕(たゞき)ゆえ
あまりに悲しくなほ接吻す。

みどりを拜む

みどりを拜む
つみかさなれる樹の果を拜む。
さびしい下宿の窓から

のぼる町のけぶりと綠とを拜む。
けふも安らかに暮れてゆくゆえ
みどりを拜む。

卓上噴水

わが友、
さかづきを擧げよ。
噴水はそそぎやむことなく、
雪のごとき鴨はげにさんさんたり。

酒は滴たる天地のあぶら、
新綠無上禮拜の
たふときなみだふりそそぎ、
わが友
さかづきをあげよ。
かつては死にたる愉快。
あをざめたる愉快をして立たしめ、

かつ舞はしめ、
くちびる裂けて血たるる杯をあげよ。

「抒情小曲集」をわり

再刊小言

「抒情小曲集」初版は大正六年　月に發售したものであつて今から七年前である。作に從つたのは私の二十歳から二十四歳くらゐに亘つてゐる。小景異情最も古く、卓上噴水が一番新しい作である。初版「抒情小曲集」に卓上噴水は收錄してゐない、

故に初めて讀まれる方があらうと思ふ。兇賊チグリス氏は原稿が散逸してゐて本集收輯の末行十行ばかり見當らなかつた。あらたに作つて添付するの純を虧くため、わざと心ならずもその缺行の儘にして置いた。

疑義を挿んで前著「青き魚を釣る人」と本集「抒情小曲集」との、孰れが前後に作事されたものであるかと言ふならば、殆同時代と言つてよいので

ある。自費出版したときの好みによつて排したものを「青き魚を釣る人」におさめ、撰んだものを「抒情小曲集」として、前著に先立つて刊行した。いづれも少壯時代の作たることに疑はない。が、「抒情小曲集」は小曲らしい體韻を爲したものの全豹であつて、いぢけた花の呼吸をなほ鼎ぐやうな氣もちでは、本集に勝るものはないと思ふ。本集の詩をいち早くこれを世に薦めたのは先輩北原

白秋兄であつて、顧みると白秋君の私に致した交誼は詢に筆舌に餘る高恩である。謝して献本する所以である。同時に萩原朔太郎君もともに私を勵してくれたことは言ふまでもない。

大正十二年六月

魚眠洞主人識

目次

白魚（故郷にて）

小景異情　その一……（1）
小景異情　その二……（4）
小景異情　その三……（6）
小景異情　その四……（7）

小景異情 その五 …… (8)
小景異情 その六 …… (9)
旅途 …… (11)
京都にて …… (13)
流離 …… (15)
木の芽 …… (18)
祇園 …… (19)
夏の朝 …… (21)
寺の庭 …… (22)

旅上 …… (23)
三月 …… (26)
足羽川 …… (28)
ふるさと …… (31)
犀川 …… (33)
みやこへ …… (35)
寂しき春 …… (37)
利根の砂山 …… (39)
氷の扉 …… (42)

櫻と雲雀……（44）
土筆……（46）
前橋公園……（48）
かもめ……（50）
海濱獨唱……（52）
蛇……（55）
砂山の雨……（57）
魚とその哀歡……（60）
赤櫨……（62）

時無草（故郷にて）

時無草……（64）
永日……（66）
秋の日……（69）
小曲……（72）
小曲……（73）
月草……（74）
しら雲……（76）

十一月の初旬……（77）
おなじく……（79）
くらげ……（80）
霜……（81）
樹をのぼる蛇……（82）
あらし來る前……（84）
磧……（87）
松林のなかに座す……（89）
砂丘の上……（91）

靜かなる空……（93）
水すまし……（95）
秋思……（97）
しぐれ……（99）
哀章……（101）
わかれ……（103）
雪くる前……（105）
朱き葉……（107）
山にゆきて……（109）

すて石に書きたる詩……（111）
秋の終り……（114）
煙れる冬木……（117）
大乘寺山にて……（119）

みやこにて（東京にて）

都に歸り來て……（121）
はつなつ……（123）
蟬頃……（125）

蓮木町……（127）
銀製の乞食……（129）
天の虫……（131）
上野ステエション……（134）
苗……（136）
植物園にて……（138）
郊外にて……（140）
室生犀星氏……（142）
ある日……（148）

坂……（149）
坂……（154）
斷章……（158）
道……（159）
酒場……（162）
街にて……（164）
夏の國……（167）
二つの瞳孔……（170）
あさぞら……（172）

郊外にて……（173）
寂しき椅子……（174）
十月のノオト……（176）
合掌　その一……（180）
合掌　その二……（181）
合掌　その三……（183）
合掌　その四……（184）
合掌　その五……（185）
合掌　その六……（186）

卓上噴水
遠くより伸ぶるもの……（190）
銀行街……（193）
裸形崇拜……（195）
右……（197）
雨中佇立……（199）
兇賊TICRIS氏……（202）
あさくさ……（214）

夕日……（216）
とくさ……（218）
接吻……（220）
みどりを拜む……（222）
卓上噴水……（224）

抒情小曲集

定價 壹圓八拾錢

大正十二年七月一日印刷
大正十二年七月五日發行

著作者 室生犀星

合資會社アルス代表者
發行者 北原鐵雄
東京市京橋區銀座尾張町新地五號

印刷者 山本源太郎
東京市小石川區久堅町四十五番地

製本 吉崎

發行所 東京市京橋區銀座尾張町 合資會社アルス
電話銀座二一九三番
振替東京二四八八八番

室生犀星詩選・室生犀星氏著

本書は詩集「青き魚を釣る人」以外の至純にして純情の限りをつくせる「抒情小曲集」人間愛の大道に歌へる「愛の詩集」、「第二愛の詩集」著者多年の勞苦より更に轉じて靜安の境に入り、極りなき都會の諸相を凝視して唄へる「寂しき都會」等著者の金澤時代より今に至る全詩作中より、最も代表的にして、得心の作を選載せるものなり。

その一章、一聯讀者をして、美しく、清らかなる小川に起るせせらぎの如き、微妙にして情熱的恍惚と心情の優和とを覺えしめるであらふ。涙も歡喜も、寂寥も、總てが自發的に發揮されてゐるものは本書である。

銀の時計をうしなへる
こころ悲しや
ちよろちよろ川の橋の上
橋にもたれて泣いてをり

——小景異情——その三——

恩地孝四郎氏裝幀
四六大版絹表紙箱入美本
定價貳圓貳拾錢
送料十七錢

詩集 水墨集

北原白秋氏著

詩壇多年の渇望を充し、詩の最高標準を示せる巨匠白秋氏の十年目の新詩集出づ

私は境涯の詩といふことを考へてゐる。詩はそこまで行かなければ眞に個性の表現とは云へまい。その人その境涯あつての詩であり、さながらの表現なる故に不二のものとなる。これをゆるがせにすべきではあるまい。在りのままに在らせてもらふこと、この忝さに私は禮拜する、自然隨順、實相觀入、この所念は幾度も私が云つた。まことに正しく高く常に虔ましき觀相こそは尙ばるべきである。境涯の詩がここより生れる。……

跋文の一節……

内容

雪に立つ竹　初冬の星　水墨集
虎の煙草　麵麭と薔薇　落葉松
緑の黎明　薄陽の旅　芙蓉の季節　初冬短曲抄
動き來るもの　圓光の智者　月光微韻　野茨に鳩
本文紙刷・表紙カンバスクロース金箔押
四六大版特製美本・定價參圓五拾錢・送料二十三錢
十四章貳百六拾五篇

抒情小曲 青き魚を釣る人

室生犀星氏著

それらの小曲集は、藝術と言はんよりは、むしろ餘りに切實にして、あまりにいぢらしい純情のうたごゑである。胸も張り裂く感情の出水である。さばかりかかりそれが讀む人の心に高い響をあたへるのは當然である。――かくの如き詩は著者に於てもふたたび得がたく、未來の日本詩壇に於ても、おそらくは最早二度と得がたいものであらふ……萩原朔太郎氏序文の一節……

内容

青き魚を釣る人　二十八篇
青草に座す　十四篇
霜　十篇
愛　七篇
魚の詩　七篇
樫木　七篇

恩地孝四郎氏裝幀
菊半截版ボフリン水色表紙
定價　金壹圓八拾錢
送料　金拾五錢

月に吠える・萩原朔太郎氏著

本書は日本詩壇の今日を遠く豫感した最初の黎明であり、本詩集以前にかうしたスタイルの口語詩は一つもなく、すべての新らしき詩のスタイルは此處から發生されて來た。本詩集世に出でて、正に時代は一つのエポックを劃せるものである。著者はこの詩集に對する最大の自信が此處にあると稱してゐる以つて其全てを窺知しうべし。室生氏曰く、萩原の詩はいつも白いやうな青みのある一枚の畫布のやうに、そしていつも蛙や蝸牛の陰影をゆめみるやうな氣がする。萩原の心象には決して類を見ることのできない陰影があつて、それがほつそりと寂しく紙の上に、にじみ出てくるやうな氣がする。『月に吠える』が曾て自費で出版されて、今七年後にアルスから出ることと云ふことは、何といふこのいつも孤獨で居る友を喜ばせることであらう。そしてこの詩集を期待してゐる人々もこの異情にさびしい心象をいかに微かく讀み味ふことができるであらう。

故田中恭吉氏挿畫七葉
恩地孝四郎氏裝幀

・□定價貳圓五拾錢
・□送料拾七錢

情緒哲學

新らしき欲情・萩原朔太郎氏著

日本に初めて現はれたる鮮新なる直感觀照の新型式によつて描かける哲學藝術！

本書は詩であり、哲學であり、美學である。すべて此の非凡な詩人の靈感に觸れて電光の様に放射されたさまざまの思想の交響樂である。「どんな天氣の日に追憶すべきか」「色情は藝術であり得るか」「眞理は風景の中にある」等二百五拾五章、全卷に溢るゝ鮮新なる香氣、俊敏なる感覺、自由清新なる思想は嘗て見られざる新文體によつて表現されてゐる一度本書を手にした人は魔女の舌に吸ひ寄せられた様に幻惑と現實の交錯境裡にただ恍惚としてしもふであらう。

恩地孝四郎氏裝幀
四六大版箱入美本

定價貳圓八拾錢
送料拾七錢

北原白秋氏著 **白秋詩集** 全二卷 定價各貳圓八拾錢 送料各十七錢

北原白秋氏著 **觀相の秋** 定價壹圓八拾錢 送料拾七錢

北原白秋氏著 **白秋小唄集** 定價壹圓八拾錢 送料拾參錢

北原白秋氏著 抒情小詩 **わすれなぐさ** 定價壹圓八拾錢 送料拾參錢

北原白秋氏著 民謠集 **日本の笛** 定價貳圓八拾錢 送料拾八錢

二見孝平譯著 **アンナ・パヴロヴ** 定價壹圓貳拾錢 送料拾壹錢

舞臺藝術同人譯 **露西亞舞踊大觀** 定價貳圓八拾錢 送料拾五錢

山田耕作著 童謠樂譜 **かやの木山** 定價五拾錢 送料貳錢

弘田龍太郎著 童謠樂譜 **山のあなた** 定價五拾錢 送料貳錢

弘田龍太郎著 童謠樂譜 **夕燒とんぼ** 定價五拾錢 送料貳錢

日夏耿之介氏著　**轉身の頌**　定價貳圓五拾錢　送料拾七錢

日夏耿之介氏著　**黑衣聖母**　定價貳圓五十錢　送料拾七錢

上田敏氏選註　**小唄**　定價壹圓八拾錢　送料拾五錢

新詩會編　**現代詩集**　定價二圓五拾錢　送料拾八錢

牧神會編　**牧神詩集**　定價貳圓貳拾錢　送料拾七錢

竹友藻風譯　波斯古詩　**ルバイヤット**　定價壹圓參拾錢　書留送料拾壹錢

竹友藻風譯　**ヱルレエヌ選集**　定價壹圓參拾錢　書留送料拾壹錢

堀口大學譯　**サマン選集**　定價壹圓五拾錢　書留送料拾壹錢

矢野峰人譯　**シモンズ選集**　定價壹圓六拾錢　書留送料拾壹錢

山宮允譯　**ブレイク選集**　定價壹圓六拾錢　書留送料拾壹錢

山本鼎著　美術家の欠伸　定價貳圓　書留送料拾七錢

若山牧水著　靜かなる旅を行きつゝ　定價貳圓五拾錢　書留送料拾七錢

中原悌二郎著　彫刻の生命　定價參圓五拾錢　書留送料拾七錢

村山槐多著　槐多の歌へる　定價貳圓五拾錢　書留送料拾九錢

村山槐多著　槐多の歌へる其後　定價貳圓五拾錢　書留送料拾七錢